

令和5年度
愛媛県議会海外派遣（南米）
実施報告書

令和5年11月9日（木）～18日（土）

ブラジル連邦共和国
パラグアイ共和国

目 次

1	はじめに	1
2	派遣目的	1
3	派遣期間	2
4	議員団の構成	4
5	派遣結果報告	5
6	終わりに	25

1 はじめに

愛媛県議会海外派遣（南米）議員団長 川本健太

在伯愛媛県人会創立70周年を記念し、ブラジル連邦共和国サンパウロ市において執り行われる記念式典等に参加するため、県議会から、超党派7名の訪問団を編成した。

なお、今回の海外派遣は、中村時広知事を団長とする公的訪問団に加わる形での海外派遣となり、公的訪問団及び民間訪問団合わせて、総勢31名での訪問となった。

訪問団は、同式典への出席をはじめ、在サンパウロ日本国総領事館やサンパウロ市議会への表敬訪問、県人関係企業視察などを行うとともに、海外技術研修員・県費留学生経験者との意見交換を行った。加えて、パラグアイ共和国イグアス市も訪問し、日本人学校や現地農業協同組合等の視察を行った。

松山空港を出発し、約35時間をかけて辿り着いたブラジル初日から、帰路に就く直前まで、視察を行う密度の濃い日程であったが、記念すべき70周年の節目に現地を訪れ、県人会の皆さんと喜びを共有し、親睦を深めることができ、我々訪問団にとって、大変有意義かつ感慨深い海外派遣となった。

これらの実施結果について、派遣に参加した各議員から報告する。

2 派遣目的

愛媛県海外協会が主体となって編成する官民一体の「在ブラジル愛媛県人会創立70周年記念公的訪問団」に参画し、現地で開催される記念式典への参加、関係行政機関への表敬訪問、現地在住の県人との交流等を実施し、両国との友好関係を促進する。

3 派遣期間

令和5年11月9日（木）～11月18日（土）までの10日間

【日 程】

	月 日	地 名	時 刻	スケジュール
1	11/9 (木)	松山空港	7:05	松山空港 発
		羽田空港	8:20	羽田空港 着
			12:15	羽田空港 発
		独: フランクフルト	18:55	フランクフルト空港 着
			21:55	フランクフルト空港 発
				機 内
2	11/10 (金)	伯: サンパウロ	5:55	グアリュージュス空港 着
			11:00	(1) 在サンパウロ日本国総領事 表敬訪問
			15:00	(2) サンパウロ市議会 表敬訪問
			17:00	(3) 在伯愛媛県人会会館 視察
			19:00	(4) 在伯愛媛県人会主催歓迎会
				サンパウロ 泊
3	11/11 (土)		8:30	(5) 開拓先没者慰霊碑 参拝・献花
			10:00	(6) ブラジル日本移民資料館 視察
			14:30	(7) サクラ醤油 視察
			17:30	(8) 百合農場 視察
				サンパウロ 泊
4	11/12 (日)		10:00	(9) 在伯愛媛県人会創立70周年記念式典
			18:00	(10) 海外技術研究員等 意見交換会
				サンパウロ 泊
5	11/13 (月)	芭: イグアス	9:05	グアリュージュス空港 発
			11:00	イグアス空港 着
			17:00	(11) 在芭愛媛県人会主催歓迎会
				イグアス 泊

6	11/14 (火)		9 : 15	(12) イグアス墓地 訪問
			9 : 45	(13) イグアス日本人会 訪問
			10 : 45	(14) イグアス日本人会資料室 視察
			13 : 30	(15) イグアス農業協同組合 訪問
				(16) イグアス日本語学校 訪問
イグアス 泊				
7	11/15 (水)	伯 : サンパウロ	9 : 00	(17) イタイプ水力発電所 視察
			14 : 45	イグアス空港 発
			16 : 25	グアリュージョス空港 着
サンパウロ 泊				
8	11/16 (木)		9 : 30	(18) 藤原農場 視察
			18 : 45	グアリュージョス空港 発
機 内				
9	11/17 (金)	独 : フランクフルト	10 : 15	フランクフルト空港 着
			13 : 45	フランクフルト空港 発
			16 : 25	グアリュージョス空港 着
機 内				
10	11/18 (土)	羽田空港	10 : 30	羽田空港 着
			14 : 55	羽田空港 発
		松山空港	16 : 30	松山空港 着
-				

4 議員団の構成

次のとおり、川本 健太議員を団長に全7名の議員団を編成した。

【議員団名簿】

	氏 名	期数	会 派	備 考
1	川本 健太	3	自由民主党	団 長
2	越智 忍	9	愛媛維新の会	
3	西岡 新	2	日本維新の会	
4	菅 森実	2	リベラル愛媛	
5	新田 泰史	2	自由民主党	
6	井川 剛	1	無所属	
7	小島 源	1	自由民主党	

5 派遣結果報告

(1) 在サンパウロ日本国総領事 表敬訪問

[11/10 (金)]

【文責：小島 源】

在サンパウロ日本国領事館が入るビルは、当初、日本の商社が所有していたもので、現在はブラジル資本が介入しており、ほかにも日本法人が入居している。

同領事館では、小室千帆主席領事に対応していただき、サンパウロについて概要説明を受けるとともに、質問等に応えていただいた。

小室氏は、平成元年の外務省入省以来、在リオデジャネイロ総領事館、在オランダ大使館、在ポルトガル大使館などの勤務を経て、令和3年6月より、在サンパウロ総領事館主席領事に着任している。



サンパウロ州の面積は、24万8,200 km²（ブラジル国土の3%で日本の本州+四国ほどに相当）で、人口は、サンパウロ州4,442万人（2022年ブラジルの22%がサンパウロ州に）で、サンパウロ市には、1,145万人が密集。



農業大国であり、大豆・砂糖・コーヒー・オレンジジュース・鶏肉・タバコの生産量が世界1位。鉄鉱石・石油・レアメタルの算出も世界上位。自動車生産台数も世界のTOP10に入るなど、実にブラジルGDPの30%がここで生み出されている。

ブラジルでは、1908年に初めての日本人移住者を受け入れ、現在は世界最大の200万人超の日本人・日系人が居住し、そのうち120万人がサンパウロ州に住居を構えている。

喫緊の課題は、1世から2世、3世以降への世代交代及び県人会の活動への参画。3世以降ともなると、家庭でも日本語を使用されることもなく、日系人自らがアイデンティティに迷うところも多くあるようである。

同州への日本企業進出は約370社。主要商社やメガバンクをはじめ、トヨタやホンダ、金融系・食品系など、同州から南米全体を統括している企業が多い。

(2) サンパウロ市議会 表敬訪問

[11/10 (金)]

【文責：小島 源】

次に、サンパウロ市議会を訪問し、日系3世のジュオルジ羽藤議員に対応していただいた。



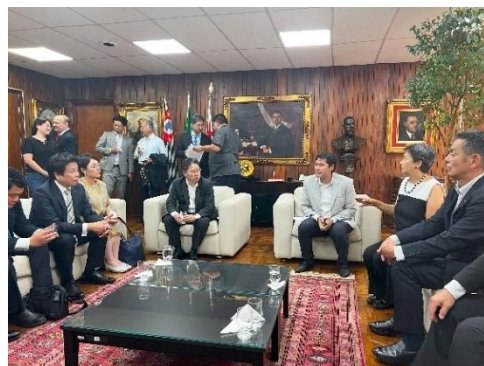
彼は3世で日本語対応は難しいが、今治市玉川にルーツを持ち、55人のサンパウロ市議会の中に3人いる日系市議会議員の1人である。実は、10年前の60周年記念式典訪問時に御対応いただいたサンパウロ州議会議員であったジョージ羽藤氏の息子さんである。

市議会ビルでは、ジュオルジ羽藤議員によるアテンドで、普段立ち入ることのできない屋上ヘリポートや議場、記者会見フロアなどを見学した。

とりわけ議場では、子ども市議会（高校生による議会訪問）が開催されており、その中で、愛媛県からの訪問団として高校生100人を前に御紹介いただいた。



次に、場所を議長室に移し、訪問団を代表して高山康人議長がゴールデン・ブック（市議会訪問者リスト）に署名。訪問団からは、桜井漆器の記念品がジュオルジ羽藤議員に贈呈され、ジュオルジ羽藤議員からは、訪問団全員にサンパウロ市章のブローチ及び記念品が贈られた。



なお、地元のケーブルテレビ局が一連の流れに密着取材を行っており、後日、ニュースとしてサンパウロで放映された。

(3) 在伯愛媛県人会会館 視察

[11/10 (金)]

【文責：井川 剛】

サンパウロ市議会表敬訪問の後、在伯愛媛県人会会館を訪問した。

当施設は、在伯愛媛県人会創立 40 周年事業として開設され、会員相互の交流はもとより、県費留学生に関すること、母県や他の日系団体との交流、また、生活困窮会員のサポートなど、愛媛県に縁のある日系人の支えとなる拠点施設である。



サンパウロのグローリア通りにある当施設の外観は、鉄筋コンクリート 3 階建ての老朽化が伺える年季の入った建物で、1 階が貸テナント、2 階が事務所と大広間、3 階が簡易な宿泊所となっている。

到着後、2 階の大広間に案内され、永山オヂネテ恵子会長より、歓迎の御挨拶と、施設や会の運営についての説明があり、その後、我々を待ってくださっていた会員の皆様とお茶を頂きながらの歓談で交流を図った。

その中で、会の運営費については、1 階テナントの家賃収入と会員からの会費、それと愛媛県からの補助金で賄っているが運営は厳しい状況であること、また、建物の老朽化が進む中で、いずれ訪れる建て替えについて不安を持っているという話が印象に残っている。

これから先、何十年、何百年経っても、自分が日系人であること、また、先祖が愛媛からこの地に移り住んだことを忘れず、誇りをもって次の世代にバトンをつないでほしい、そんな思いを残し、40 分余りの僅かな滞在で当施設を後にした。

(4) 在伯愛媛県人会主催歓迎会

[11/10 (金)]

【文責：小島 源】

ホテルから貸し切りバスで移動し、ブラジルの定番料理であるシュラスコを名物とするシュラスカリアDで歓迎会に参加した。

在伯愛媛県人会から 23 名、訪問団から 30 名、計 53 名が参加した歓迎会では、永山会長の御挨拶からはじまり、今回愛媛県功労賞を受賞される藤原利貞元会長など多くの関係者から、御挨拶をいただき、現地愛媛県人会の皆様と愛媛の故郷の話やブラジルでの苦労話などに花が咲くシュラスコを囲んだ歓迎会となった。



(5) 開拓先没者慰霊碑 参拝・献花

[11/11 (土)]

【文責：小島 源】

翌日は、イビラピエラ公園内に 1975 年に建立された慰霊碑を訪れた。



この慰霊碑は、ブラジルに開拓者として渡ってこられた最初の移民の方々に念を込めて、「開拓“先”没者慰霊碑」と名付けられている。

当日は、ウィークエンドの朝ということもあり、公園内には、散歩、ランニング、

自転車とアクティブな喧騒に包まれる中、高山康人議長を筆頭に参拝、献花を執り行うとともに、参拝者名簿に訪問団全員が記帳した。



この慰霊碑は、これまで天皇皇后両陛下、皇族方、政府高官と数多くの関係者が参拝を行っている。

今のブラジル日系社会の繁栄は、初期開拓移民の犠牲の上にあることはいうまでもなく、慰霊碑の地下に祭られる名簿（無縁仏を含む）がこの地での苦闘の証である。

毎年6月18日の「移民の日」には、この日系社会の礎になった先人を祭ることが使命であるとのことであった。

(6) ブラジル日本移民資料館 視察

[11/11 (土)]

【文責：井川 剛】

ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑の参拝を終え、移民資料館へと向かう。

サンパウロは初夏と聞いていたが、通りの温度計は33度を示しており、湿度が低く日本の夏のような蒸し暑さは感じないものの、日差しが強烈で肌が痛い。この時期30度を超えるのは稀とのこと。

ブラジル日本移民資料館は、サンパウロの中心地に近い、かつて日本人街と呼ばれ、現在は中国人や韓国人が増え東洋人街と呼ばれるリベルダーデ地区の一角に建つブラジル日本文化福祉協会ビルの7階から9階にある。

1978年6月18日、ブラジル日本移民70周年祭の記念事業として、日伯両国内から集まった支援金をもとに開館され、日本文化や、1908年に笠戸丸にて当地に移民として渡った



781人をはじめとする大勢の日本移民の歴史を伝える97,000点からなる貴重な資料が展示されている館内では、岩山明郎運営副委員長から、1888年の奴隷解放令

の発令による労働者不足で困っていたブラジルと、1895年フランスのパリにおいて日伯の大使が条約を締結し、当時縁のなかった両国がつながりを持ったことから、1908年に笠戸丸による52日間の航海でブラジルへ富を求めての移民が始まったこと、また、当時の移民への待遇は良いものではなく、奴隷のような扱いもあった中、先人たちが厳しい環境、過酷な労働を耐え抜いた結果が現在の日系社会繁栄の礎になっていることなど、館内資料を基に詳細な説明を受けた。

僅か1時間程ではあったが、100年を超えるブラジル日本移民の壮絶な歴史を学ぶ有意義な視察であった。

(7) サクラ醤油 視察

[11/11 (土)]

【文責：井川 剛】

ブラジル日本移民資料館を後にし、サンパウロ中心部から西に約120kmのポイトゥバにあるサクラ中矢食品の味噌醤油工場へ向かった。サンパウロ市街地を抜けたバスの車窓からは、日本の約22倍、世界第5位の面積を有するブラジルらしい広大な畑や牧草地が見られる。高速道路BR-374のサービスエリアで食事を済ませ、視察先であるサクラ中矢食品に到着。

サクラ中矢食品は、1940年に松山市出身の日系移民である中矢末吉氏によって創業され、二世である中矢レナト健二氏により一大企業へと躍進を遂げ、醤油、味噌など300品目を手掛ける大手食品メーカーである。

中でも、サクラ醤油は、日本醤油の原料が大豆と小麦であるのに対し、安価で入手しやすいトウモロコシを使用することにより、甘味とまろやかさが特徴のブラジルでは圧倒的シェアを誇る醤油として有名である。

1932年の移住当初、個人用として家庭で作っていたものが、友人や家族からおいしいと評判になり量産を要望され、移住から8年でサクラ中矢食品を設立した。



創業から 83 年、これまで日本の醤油をブラジルに浸透させた功績は大きく、現在ではブラジル醤油業界のトップメーカーとして、また世界で活躍する日系企業として多くの人々に称賛されており、近年中国産の低価格な醤油がシェアを拡大しつつある中、日本発祥である醤油のメーカーとして更なる発展を願うものである。

(8) 百合農場 視察

[11/11 (土)]

【文責：井川 剛】

サクラ中矢食品からバスで 1 時間、ソロカバの外れに位置する百合農場への到着は 17 時を過ぎていた。

到着後、開放的で高級感満載のオフィスでのレセプションの後、140 人収容可能なオフィス内の講堂において、共同経営者である赤松巖氏より、百合農場についての説明が行われた。

赤松氏の話によると、もともとは、近所の小さな工場を借りて椎茸の菌床栽培を行っており、その際は培地の原料となるおが屑を 30km 離れたところまで買いに行っていたが、たまたま百合農場(当時は製材所)の前を通りかかったとき、大量のユーカリのおが屑が積み上げられているのを見つけ、声を掛けたのがきっかけで、百合氏と共同で椎茸栽培を始めることとなった。



当時、椎茸は原木での栽培が主流で、知識の乏しかった菌床栽培には問題も多く経営も厳しい状況となっていた。

そのような中、JICA の研修制度に応募し、1999 年に長野林業総合センターで 3 か月間の研修を受けキノコの栽培方法や、菌床栽培の培地の作り方を教わった。

帰国してからは、キノコではなく培地の需要が高まったことから、培地の販売に方向転換し、業績は上がっていったとのこと。「日本でのあの研修がなければ会社は終わっていた」としみじみと語られた。



現在のブラジルでは、日本食が浸透したこともあり、キノコを食す文化も広がってはきたが、まだまだ伸びしろがあると闘志を燃やしていた。

また、工場では、近年愛媛企業のボイラーを導入したとのことで効率がアップしたと喜んでおられたが、先に訪問したサクラ中矢食品でも同企業のボイラーを導入しているとのことで、今後、愛媛県人会が橋渡しとなって、県内企業のブラジル進出につなげる企業間交流を実施することも必要ではないかと感じた。

入しているとのことで、今後、愛媛県人会が橋渡しとなって、県内企業のブラジル進出につなげる企業間交流を実施することも必要ではないかと感じた。

(9) 在伯愛媛県人会創立 70 周年記念式典

[11/12 (日)]

【文責：新田 泰史】

すばらしい天候に恵まれたこの日、サンパウロ市内に所在するブラジル北海道協会会館において、「在伯愛媛県人会創立 70 周年記念式典」が盛大に開催された。

記念式典には、愛媛県訪問団として、中村時広知事を団長とする公的訪問団 20 名及び山本良文愛媛県海外協会会長をはじめとする民間訪問団 11 名が参加し、約 340 名の在伯愛媛県人会の皆さんと一緒に、在伯愛媛県人会創立 70 周年をお祝いし、交流や親睦を深めた。ちなみに、47 の全都道府県による県人会が存在するのは、現在、約 200 万人の日系人がいるブラジルだけである。



午前 10 時、記念式典が開会。永山 オヂネテ 恵子 在伯愛媛県人会会長が主催者挨拶の中で、「日本人のブラジルへの移民が 1908 年に始まってから今年で 115 周年を迎え、(先人たちは) 長年の苦労、自分を犠牲にしてまで、子どもたちがブラジル社会に溶け込めるように常に教育に注力してきた」、また、「愛媛県人の移民も、夢と希望を胸に、いつか祖国に戻るといふ思いで、懸命に働き、家族の絆を強くし、

異なる文化や習慣という苦難を乗り越え、新しい言語であるポルトガル語を学び、ブラジル社会に溶け込める人間を形成した。1953年には祖国とのつながりを保つため、愛媛県庁との絆を築く在伯県人会が設立され、その県人会が本日めでたく70周年を迎えた」などと述べられ、同胞が歩んできた苦難の道のりと歴史の重み、そして、この式典の重み、県人会の皆様の式典にかける並々ならぬ思いを感じ取ることができた。

愛媛県訪問団の団長である中村知事は、「長い年月の中でその思いは、2世へ、3世へ、4世へと引き継がれて、そして今なおルーツである愛媛へのつながりを大事にさせていただいていることに感謝を申し上げたいと思います」と述べるなど、先人や県人会の皆さんに心からの敬意と感謝の気持ちを言葉にされた。

また、高山康人議長は、「県議会と致しましても、県人会との連携をこれまで以上に深化させるとともに、今後もブラジルと本県とのつながりを大いに育み、友好親善に力を注いで参りたいと存じます」と決意を述べた。

また、在サンパウロ日本総領事館の小室千帆主席領事は、「これまで愛媛県におかれては周年行事ごとに慶祝団としてブラジルを訪問していただいております。県人会との交流を継続していただくことは日伯両国の文化や経済面の交流促進という点で大きな価値を有しています」と、愛媛県訪問団が式典に参加することへの意義を述べられた。

式典では、県人会の役員としてブラジルと愛媛との国際交流の進展に尽力され、愛媛県功労賞を受賞された藤原利貞県人会元会長に、中村知事から直接表彰状が授与された。また、中村知事から、在伯県人会特別功労表彰、高齢者表彰を受賞者の皆様に直接授与されるとともに、在伯県人会へ桜井漆器（大皿）の記念品が贈呈された。

そのほか、記念アトラクションなど県人会の皆さんのきめ細かなおもてなしに魅了されるなど、日本の心がブラジルの地でも紡がれていることを嬉しく思った。

式典を通して、愛媛県とブラジルとの友好協力関係を深める懸け橋として、県人会の担う役割は大きく、県人会は愛媛県の発展には欠かせない存在であると確信した。今後も連携を深めていくためにも、周年行事等の機会を捉えて、愛媛県として訪問団の派遣を続け、フェイス・ツー・フェイスでの絆を深めていくことが有効であると実感した。

(10) 海外技術研究員等 意見交換会

[11/12 (日)]

【文責：新田 泰史】

記念式典後は、海外技術研修員経験者 26 名、県費留学生経験者 5 名との意見交換会を行った。

まずは、海外技術研修員経験者、県費留学生経験者、それぞれ数名から近況報告等があった。

1994 年に、海外技術研修員として、愛媛県道前道後発電所で水力発電の研修を行った経験者からは、情熱をもって仕事に取り組むプロフェッショナル達と一緒に働く機会に恵まれたことは、自身の職業人生全体に影響を与えたことや、習得した技術的な知識や仕事に対する姿勢は今でも誇りを持ち続けている教訓となっている旨の報告があった。

また、1992 年に、海外技術研修員として、愛媛県庁統計情報課で情報技術の研修を行った経験者からは、現在はシステムアナリストとして仕事をしており、研修期間に学んだプログラミングやシステム分析の概念が今でも自身の仕事に活かされているとの報告があった。

1987 年に、県費留学生として、愛媛大学で経済経営を学んだ経験者は、県費留学は重要な経験であり、それは自身の人生の深い変化の種となったと振り返っていた。ブラジルに帰ってからも会社経営に携わるなど活躍の幅を広げているとのことであつた。

また、2001 年に県費留学生として聖カタリナ短期大学で栄養学を学んだ経験者からは、現在、栄養士として学校で栄養担当として勤めており、県費留学で学んだことが仕事に活かされていると報告があった。

そのほか、研修や留学の条件である日本語能力に達さない世代が多くなっていることも課題に上がり、日本語能力の条件の見直し等を要望したいとの意見が出された。



信頼関係が構築されている県人会の会員の子弟から受入れる、海外技術研修員（愛媛県海外技術研修員受入事業）や県費留学生（県費留学生受入事業）は、少子高齢化、人口減少が進み、人手不足、人材不足が大きな課題となる愛媛県にとって

貴重な存在であるということは言うまでもない。今後も、受入事業が継続されるよう柔軟な対応が求められると思った。

(11) 在芭愛媛県人会主催歓迎会

[11/13 (月)]

【文責：越智 忍】

南米訪問5日目となる11月13日より、パラグアイに入った。ブラジル側のイグアスから陸路での入国である。10年前の訪問と同じルートではあるが相変わらずの大混雑である。物価の格差により、働きに出入りする人や買い物や物流のトラックでゴった返している。

国境に架かる橋は約3車線の幅があるが、両サイドは通関待ちのトラックで停滞し、残る真ん中部分を二人乗りのバイクタクシーや乗用車・小型の貨物車・我々のようなバスが、隙間を縫うように行き違いを行い、見ていると大変に恐ろしい光景である。新たに増設された橋が5月には完成しているようだが、そこに行くまでの道路や入国管理施設が未完成でいまだ供用されていない。現地通訳の方によれば、あと数年かかるだろうとのことで、日本との計画性の違いに驚かされる。

パラグアイ側のホテルに荷物をほどくと、小型車両に分乗して愛媛県人会の方たちによる歓迎会の会場であるアサヒリゾートパークに向かう。

県人の方たちが経営に参画する、湖に面したコテージなども備えた施設であるが、幹線道からは数キロメートルの間、未舗装の道路がアップダウンを繰り返す場所にあり、前日までの雨により、大型バスでの進入は危険との判断であった。

小松光広県人会長をはじめ約30名近くの県人会員方たちの歓迎を受けて懇親会が行われた。

10年前は別の広めの会場での懇親会であったが、今回は川の字に座席を配置し、県人会の方と訪問団が向かい合わせになり、かなり密度の濃い交流ができたことは大変有意義であったと思う。

愛媛県人会の会員は約300名であり、定期総会の開催や海外技術研修員の推薦、老人会や青少年スポーツ・文化活動への支援などが



行われており、本県との関係においては、これまでに4名の県費留学生と同じく4名の技術研修員の送り出しを行っている。愛媛県からの補助金は年間で20万円である。

県人会の方たちからは、異口同音のように、母国や母県との交流の機会をもっと多く持ちたいとの希望の声が強く寄せられた。10年に一度ではなく、出来れば毎年、難しければ数年に一度程度は母県の訪問団との交流を望まれていた。

(12) イグアス墓地 訪問

[11/14 (火)]

【文責：越智 忍】

翌11月14日は愛媛県人会の小松光広会長をはじめ、有志の方たちの案内により、イグアス移住地内にある、日本人会が所有し、先人移住者たちの眠る墓地への参拝を行った。

この墓地には、愛媛県人36名を含む日本人359名が埋葬されている。そのほとんどが土葬であり、感染症などで亡くなった方は火葬されている。また、一部の方はホルマリン処理による保存が行われており、節目ごとには家族や友人が面会に訪れるとのことである。整然と整備された墓地の中心には、屋根付きの立派な慰霊塔があり、参加者全員で献花と黙とうを捧げた。



(13) イグアス日本人会 訪問

[11/14 (火)]

【文責：越智 忍】

その後、愛媛県人会も主要メンバーとして参画しているイグアス日本人会を訪問した。

イグアス日本人会は、1967年にイグアス自治会として発足し、1978年に日本人会に改称、その後、1980年には社団法人としての認可を受けているそうである。

各種セクションを擁しており、総務部事務局では、大使館関係業務である戸籍関係・在留証明を扱い、各事業部門の人事や経理・法務なども扱っている。事業部で



では、採石場の運営や上水道の管理なども扱っている。福祉・厚生部では、診療所(外科・内科・循環器・産婦人科・整形外科・小児科・歯科・リハビリ)を運営し、高齢者福祉のデイサービスや前述の墓地の管理を行っている。教育部では、幼稚園・日本語学校(小・中・高)の運営を行っている。

そのほか、体育部、文化部、婦人部、青年部などもあるが、変わったところでは、警察協力部という組織が存在する。聞いたところ、パラグアイでは、政権が変わるたびに、貧しい国民に土地を無償で分けるような公約が横行し、その結果、現在でも不法に土地を占拠しようとする者が後を絶たず、警察とともに実弾を所持し、紛争阻止に当たっているとのこと。

このように、他国の県人会や日本人会とは一線を画す組織体制と運営がなされており、まるで一つの自治体のような様相を呈している。その要因としては、南米を含む他の国における移住とはその経緯が大きく異なることがあると思う。

多くの国における移住者は、国内各地において散らばり、開拓してきた歴史があるが、パラグアイにおいては、JICA がその歴史に大きく関係をしている。JICA といえば、真っ先に青年海外協力隊や国際協力・緊急援助などのイメージが強く浮かぶが、実はその前身は、日本移住振興株式会社という組織であり、イグアス居住地も、当時の JICA により調査・開発・取得された地域である。そのため、地図を参照すれば分かるように、他国のように各地に移住者が散らばることなく、区画整理された開発地域に入植しており、したがって、日系人同士の非常に密接で強固な協力関係が構築されて現在に至っている。そうした経緯から、他国の移住者と比較する

と、日系人であること、愛媛県人であることの誇りを持ち、歴史・伝統・文化を継承するとともに、日系人の特徴である勤勉さによってパラグアイ国内においても、政治・経済・法務など各分野において活躍をしている。

このようなことから、今後の本県とパラグアイとの交流に関しては、単なる県人会との交流という捉え方よりも、一つの自治体との交流という考え方で進めていくことが大切だと思う。

10年前のレポートに記載した内容については、極力重複を避けたので、議会ホームページにアップされている「平成 25 年度海外派遣報告書」と合わせて御一読いただければ幸いである。

(14) イグアス日本人会資料室 視察

[11/14 (火)]

【文責：菅 森実】

11月14日、どしゃ降りの大雨が降る中、バスで社団法人イグアス日本人会イグアス移住史料館へ向かった。

同資料館には、独立行政法人日本万国博覧会記念機構の助成と入口に看板が掲げられており、イグアス日本「匠」センター館長の園田八郎氏（写真：前列真ん中の椅子に座っている男性）が、御説明くださった。



室内には、各国訪問者パネル展示以外にも、日本から持ち込んだ品や、愛媛県人が収めた品もあるとのこと。かつての日本の農家納屋にあった様な木製の農業器具や大工道具、五右衛門風呂、タイプライターや工芸品、おもちゃ・人形や絵画等が展示されており、私も懐かしさを覚えた。それらの提供品には、提供者も併記された紙が一つひとつラミネートされ、添えられていた。

日本人におけるパラグアイへ計画的移住をした移民は、第二次世界大戦後が多数を占め、その歴史は比較的新しい。当時日本での生活は苦しく、国策として自国民を他国に送出し、現地で就労し富を蓄積するよう奨励した移民政策により、愛媛県からも5,000人を超える人々が移民をしている。ちなみにピラポでは、移住が始ま

り現地で最初に生まれた新生児は、愛媛県の旧美川村出身の子であったとのこと。

東日本では横浜、西日本では神戸の六甲にあった移住斡旋所で、2週間程現地の言語を学んだり、現地の情報を得たりし、長崎屋や大西屋といった店舗ではカマ等の農機具を購入して、移民先の暮らしに備える人たちもあったそうだ。

1908年4月28日、781人を乗せたブラジルへの最初の移民船「笠戸丸」が神戸の港から出港したが、移住船は、長さ160m程で1等から3等の階層があり、移動に要する2か月近くの間、情報提供・共有のために船内新聞が発行されたり、剣道等の武道や運動を通じた移住者同士の交流も図られたりした。また、3日おきに各地の港に寄りながらの航路であったため、必要なものの購入もできた。また、船内には常駐医師がおり、病気や怪我の対応だけでなく、乗船している人々の精神面のフォローにも当たったそうだ。乗船者は、お互いを思い合い、掃除をはじめとして、衛生管理をしっかりと行って感染症対策には細心の注意を払った。また、日本人の几帳面な性格や生活態度は、他国で驚きをもって評されたそうだ。

移住後の戦争中は、「日本語を喋るな」「日本人で集まるな」と指示されたとも言われておられた。戦争で40%の国土を失い、その後の復興に力を合わせ歩んできたとも言われていた。後に鉄道が敷かれ、物流輸送等も含め近代的な文化も進んだ。

主には農業を目的として移住し、移住最初の30年程は自給自足に近い生活の中で電気も通っておらず、原生林を開拓しながらの農業はおろか、暮らしていくのも大変な状況が続いた。中には、あきらめて日本に帰る人や途中で亡くなられた方もおられたそうだ。しかし、生産性の高い耕地へ変え、高い農業技術をもってパラグアイの農業経済を支えてきた日系人への国内評価は高く、信頼をおかれている。

園田センター館長が「稼げるところに人間は流れていく」と言われたことが、印象に残った。その理由については、次の視察先で確認することができた。

(15) イグアス農業協同組合 訪問

[11/14 (火)]

【文責：菅 森実】

続いて、イグアス農業協同組合において、工藤組合長はじめ役員の皆さんから現在の取り組み等について伺い、質疑応答を行った。

パラグアイの気候は、10℃以下になることもあるそうだが、基本的には温暖で湿度が低く、季節は夏と冬に大別され、春と秋は短いと言われる。

また、パラグアイに暮らす日本人にとって重要な栽培作物とも言える大豆栽培については、1961年12月10日設立された本組合では、1970年代大豆への転換を始め、1980年代に本格移行した。これにより、この地において不耕起栽培の定着化が成功し、相場や暮らしが安定した。

パラグアイにおいて、農業従事者が多いイタプア、イグアス、ラパス、ピラポの中で、肥沃広大な土地があるイタプアは、愛媛県からの移住者も多く、大多数が大規模農業とのことだった。最も新しく1961年に開設された移住地であるイグアス移住地には、「広い・



条件の良い土地が欲しい」等と農業経営に対する意識の高さが伺える他移住地からの転入者も目立ち、流動性の高い日本人移住者が集まる農業社会といえる。その転入者の出身地は、日本政府が街をつくったラパス、同様にパラグアイ南東部の移住地であるピラポである。しかし、日本からの直接移住者は1980年代前半以降減少し、転入者が多いイグアス移住地でも多くの転出者があり、移住者総数に対する転出者の割合は約60%にもなっている。この辺りのことを、先の園田センター館長が言わんとするところかと感じた。

さて、本組合では、1990年代に入り、畜産部門でと殺場整備等に力を入れ、2000年代には、パック肉作りや販路開拓に力を注ぎ、新牛舎やバンカーサイロ増設工事を進めている。牛の肥育や販売等も順調であり、労働者を増やして各部門強化を図っている。

日本とのつながりは、大豆輸出を軸としており、2011年東日本大震災時は100tの大豆を豆腐にと送ったとも報告された。

質疑応答では、大豆の99.9%が遺伝子組換えであり、初年度は入口を分けたが、翌年以降は経費が安い方へ農家が流れたことや、大統領が変わるごとに引き起こされる地主とのトラブルや、ダム建設等の土地の権利争い等が絶えず、自分たちの土地を守れぬまま政治的にも利用されてきたため、組合費から防犯・パトロール等の車の燃料代等を出し、治安維持にも努めているとのこと、新規就農者がおらず、減少傾向にあることが報告された。また、スマート農業が進み、ドローン活用等にも取り組んでいるとの発言もあった。

今後は、マカダミアナッツを加工して出荷しようとしていることや、将来は、JICAと協力しながら、日本にある道の駅の様な建物をイグアス移住地にも造りたいとい

ったことについて説明があり、また次の機会にはこの地が変わっているのだろうと想像した。

(16) イグアス日本語学校 訪問

[11/14 (火)]

【文責：菅 森実】

次に、バスでイグアス日本語学校へ向かった。

同校は、1963年に開校し、現在、小学1～6年生・中学と高校各3学年の計12年144人の在学生在がいる。教育目標の一つには『日本語による学習を通し、日本の優れた文化・習慣を吸収し国際的文化人たる素地を養う』とあり、日本語の習得や、夏盆や書道コンクール等の日本の文化に係る学習が実施されている。

日本という国が憧れられるのは、戦前からの日本人移住者たちが困難に立ち向かい生きてきたからに他ならない。パラグアイでも『日本人は勤勉だ』という印象をもたれ、後に続く人たちに大きな信用が与えられたと言われ、現在は農業のみならず、都市部と中心に、商業・工業・金融業等あらゆる分野においても、『日系人は勤勉で正直』だという評価を得ているという。

これまで、一世の努力により、パラグアイの日系社会では、南米の日系社会で高い日本語能力を維持してきた。世代が進むにつれ、家庭内ではスペイン語を使い、日本語を話さない家庭も増えてきている。

日本に留学して学んで帰国することでより良い就職先をとという側面からも、地域の非日系人からも日本語教育のニーズが高まっている。授業料については、日系は県人会会費から支出されるとともに、非日系は保護者が頑張って払っているとのことであった。経済成長や雇用面から、日本が憧れられるということに驚きもあった。

児童らは、日本アニメの大ファンだそうで、アニメを通じて日本を知る側面もあるようだ。訪れた日から期末テストが始まったクラスもあったが、廊下沿いに拝見したところ、温かい雰囲気の中で、無邪気な笑顔を見せてくれたり、お辞儀をしてくれたり、日本の子どもたちと変わらないなあと嬉しく感じた。



(17) イタイプ水力発電所 視察

[11/15 (水)]

【文責：西岡 新】

エルニーニョ現象による昨日からの雨も上がった朝、パラグアイとブラジルが共同で建設したイタイプダムを視察した。

両国の国境であるパラナ川は、雨の影響で赤土が混ざった川の色が特徴的だった。それをまたぐ水力発電ダムは、2009年に中国の三峡ダムが完成するまで世界最大の水力発電ダムとして知られており、観光名所にもなっている。



今回、私も初めて知ったことであるが、近世のパラグアイはラテンアメリカの雄と

して君臨していた。しかし、1864年に同盟を組んだブラジル、アルゼンチン、ウルグアイとのパラグアイ戦争、その後のボリビア戦争によって、国土の40%と多くの成人男子を失い、国力が大幅に低下した歴史があった。そのため、ダム建設に当たり、大部分の費用をブラジルが負担したとの説明があった。



堤防の長さは約8km、貯水量は290億t、貯水湖の面積は1,350km²と、琵琶湖の約2倍という全容を誇り、川幅を広げるために3年の歳月を要し、建設工事でも136人が亡くなった。21基の水力発電機により1,400万kWの発電ができ、その電力は両国で均等に分割されている。パラグアイは、国内の電力を賄った上に、余剰分をブラジルに売電しているとのことである。

次々に観光バスが到着しているように、この地域の観光名所でもあるが、現地ガイドに聞くと、新型コロナウイルス感染症の影響もあって、観光客は大幅に少なくなっているとのことであった。また、施設の案内スタッフに車椅子の方々が多く配置されているなど、障がい者雇用の配慮が感じられた。

今回は、タイトなスケジュールのために駆け足で車窓からの見学が中心となったが、観光名所もかねる圧倒的な規模の水力発電所であった。

(18) 藤原農場 視察

[11/16 (木)]

【文責：西岡 新】

帰国便に搭乗する訪問最終日は、藤原利貞氏が経営する農場を訪問した。

同氏は、警察官であった父親の仕事の関係で、今治市宮窪町に生まれ、その後は県内各地で育ち、大学卒業後の1976年にブラジルへ移住された。

その後、在ブラジル愛媛県人会長を務めるなど、愛媛とブラジルの交流に尽力され、今年度の県功労賞に海外在住者として初めて選ばれ、県人会創立70年記念式典で中村時広知事から直接表彰を受けた。式典の進行では、愛媛県の国際交流・協力事業である県費留学生と海外技術研修員を経験した



2人のご令嬢が司会や通訳を担当し、交流促進へ献身的に取り組まれていた姿が印象的だった。

藤原農場は、御子息のパウロ真人氏や、約110名のブラジル人従業員で運営されている。藤原氏は、移住当初は畜産業に従事していたが、1980年に元手が掛からないということもあり、花きに切り替えた。これが花好きなブラジル人にうけて「ミニバラの王様」といわれるほどに事業を成功に導いた。当初は、2.4haの土地から始めたが、評判を聞きつけた周辺の土地所有者から、自分の土地も引き受けて欲しいという依頼が相次ぎ、現在は33ha、ハウス10haの規模を誇っている。

商品は、ミニバラをはじめ、ポインセチアやアジサイ、デンドロ、デンファレ、カトレア、オンシジュームなどを栽培しており、更には、白や赤が主流である胡蝶蘭の新たな色の品種を売り出し、同国で人気を博しているようだ。施設内を見学させてもらったが、品種改良への様々な取り組みなど、常にニーズに応える努力を怠らない姿勢を感じた。

ブラジル人は陽気でマイペースで、仕事も長続きしない国民性だといわれているが、藤原氏を父と慕う従業員も多く、農場では20年以上の勤務から中には35年を超える方もおられ、“藤原農場ファミリー”として絆も強い。かつて、藤原氏が日本滞在中にすい臓がんが発見された時に、ブラジルの医者に掛かりたいと日本での治療を薦める周囲のアドバイスを振り切って強行に帰国した。



その年末、恒例となる従業員家族も参加する大規模な忘年会で、従業員たちがサプライズで病気回復を応援するビデオを作成し、琴線に触れる数々のメッセージを贈られ、生きる活力をもらったということであった。現に、すい臓がんを発病した方とは思えない元気な姿で各所の案内を精力的にしてくださった。今回の訪問の際にも、そのビデオを見せてもらったが、こうした関係性を築く力が異国の地で成功した理由だったのではないかと感じた。

藤原氏とは、サンパウロのグアルーリョス空港での出迎えから、歓迎会、記念式典などで同席する多くの機会を得ることができ、様々な経験談を聞くことがあったが、

「楽な方を選ぶ人や諦めの早い人は損をした。信念を貫くことが大事」と言われていた。これはブラジルやパラグアイで成功した人が共通して話している内容でもあった。祖国から移住船の船底に当たる3等船室で2か月もの間辛抱して、新天地で希望を実現した先人たちの奮闘の歴史に愛媛県人の誇りと活力をもらった。

6 終わりに

愛媛県議会海外派遣（南米）議員団長 川本健太

今回の海外派遣でのハイライトは、やはり「在伯愛媛県人会創立70周年記念式典及び祝賀会」であったと思う。同式典は340名もの出席者のもと盛大に執り行われ、県人会の皆さんの、日本やふるさと愛媛に対する郷土愛と、出席者に楽しんでもらおうという「おもてなし」の心に満ちた大変すばらしいものであった。

先人たちが築いてきた繁栄の礎に感謝し、我々訪問団を含む出席者全員が喜びを分かち合い、県人会とふるさと愛媛の絆を、より一層強くすることが出来た貴重な時間であった。コロナ禍を経験したからこそ、直接顔と顔を合わせて時間を共有することの大切さを、これまで以上に感じており、県人会の皆さんと共に記念すべき日にその場に立ち会えたこと、感慨もひとしおである。

また、式典では、長年にわたり県人社会の活性化や、次世代への文化継承に多大なご尽力をいただいた藤原利貞氏に、本県における最高の知事表彰である愛媛県功労賞が送られた。

藤原氏は、20歳代でブラジルに渡った、いわゆる日系一世である。今でこそ、100名を超える従業員を抱える花き農園を経営する成功者であるが、今日に至るまでの道のりは、困難の連続であったとのことであった。様々な経験談を本人の口から直接聞くことができ、リアリティを持って感じる事ができた。

さらに、同日に行った「海外技術研修員・県費留学生経験者との意見交換会」では、近況報告と共に、愛媛での生活や研修や留学で学んだ内容について話を聞いた。

技術研修員経験者の藤原ヴィオレッタさくら氏は、松山市のパティスリーでお菓子作りの研修を受けたそうである。お菓子作りの技術的な部分もさることながら、接客の仕方や仕事への取組み方など、ブラジルと日本の違いについても学ぶことができたと話してくれた。実は帰国後、藤原氏を受け入れてくれたパティスリーの代表と話をさせてもらったのだが、仕事に対する考え方や文化の違いもあり、教育系の社員と衝突したこともあったが、互いを尊重し、理解し合うことによって、社員も共に成長することができたと言っていた。

ほかにも、県費留学生経験者の山本エジソン義人氏からは、「人生の変化の種を与えてもらった」「日本の文化を大切にしたいといつも思っている」「次の世代を育てていく責任がある」といった言葉を頂き、海外技術研修員や県費留学生受入事業の価値を再確認することができた。

現地ガイドからは、「他県の県人会と比べて、愛媛県人会は若い方が積極的に関わっていて、とても活気がある」と言ってもらったが、その根拠の一端はこれらの事業の成果であると感じた次第である。

戦前に移住した日系一世や二世から、日本語を話せない四世、五世へと世代交代が進む中で、ふるさと愛媛に対する思いの希薄化は否めない。本県はブラジルをはじめとした南米諸国との姉妹（友好）都市提携はなく、県人会を通しての交流であるため、県人会と故郷えひめとの絆を次世代へと継承していくことがより一層求められる。だからこそ、研修員や留学生受入事業を継続するとともに、我々が現地を訪れ県人会の皆さんと交流し親睦を深めることは、大変有意義であると強く感じている。

愛媛県功労賞を受賞された藤原氏然り、これまで多くの日本人が新天地での希望を胸に、言葉も文化も自然環境も違う未開の地へと降り立ち、過酷な環境の中、激動の時代を生き抜いてこられた。そして、たゆまぬ努力で幾多の困難を乗り越え、農業をはじめ、政治、経済など様々な分野で活躍され、日系人社会の繁栄を築いてこられた。あらためて、先人たちのこれまでの功績に敬意を表したい。

今後、海外派遣団の議員一人一人が、今回の訪問及び視察、現地の方々との対面での交流等を通じて得られた知見や情報等を再確認しながら、各自の議員活動に生かすとともに、例えば、文化や食を通じた交流の促進、民間経済交流の推進、新たな事業展開や人材の受入れ支援など、県政の発展に資する政策立案・政策提案に結び付けていくことが最も肝要である。

今回の海外派遣に尽力いただいた関係諸氏に感謝申し上げるとともに、県会のみならずの発展と、県人をはじめとする現地の皆様の更なる御活躍を願い、結びの言葉とさせていただきます。